カフ型長期留置カテ（PTC）管理において患者と医療者間で信念対立が生じた一例

医療法人衆和会　長崎腎病院

○小野川祐子　中村麻美　橋本沙織　白井美千代　船越　哲

【はじめに】
末梢での BA 作成が困難な症例に対する PTC の有用性が報告されており、当院では通常訪問看護の介入を前提に PTC 挿入し外来通院透析を継続している。今回、医療者の介入に拒否的で、退院後も訪問看護を利用することなく PTC を自己管理したいと希望する症例を経験した。精神面へ配慮しつつ退院支援を進めることに困難さを感じたため報告する。
【症例】
65 歳男性、独身、独居。2021 年 3 月に血液透析導入。自己血管は細く、人工血管造設術施行するが、感染を 3 回繰り返した為、当院入院の上 PTC を挿入することとなる。一連の BA 関連トラブルにより、患者には PTC 挿入に対する抵抗と不満がうかがわれた。看護師が指導した方法を受け入れることなく、自己流でより良い方法を模索する姿が見られた。本人の自己効力感を低下させないよう、訴えに寄り添い、カテーテル感染を予防するための最小限の指導を行った。
【結果・考察】
退院から半年以上経過したが、カテーテルからの感染徴候なく経過している。自宅での PTC 管理には訪問看護の介入が必要と思われたが、本症例を通して、「自己流」ではあるものの、最低限の感染に配慮した指導で、自己効力感を低下させることなく PTC の自己管理が可能となり、外来透析が継続できることが示された。患者と医療者間に生じる信念対立の場面は、しばしばネガティブな印象があるが、これをSDMの機会と捉える認識の転換が求められる。